

# THE PINHOE EGG

## 重要箇所全訳

### Chap.2

**“Dad was a great one for ----- mind or no mind.” 31-32**

Dad は平和への偉大な支持者だった。彼が人生に望むことは、Uncle Richard をパートナーとして美しい堅固な家具を作って過ごすことだけだった。Furze Cottage の後ろの倉庫でその二人は様々な家具を作っていた。座っている人を心地よい状態にし続けるような椅子、使う人が幸せな気持ちになるようなまじないがかかった机、埃をためない戸棚、防虫された洋服だんすやその他多くのもの。この前の彼女の誕生日には Dad は Marianne に素晴らしい、ハート形の書き物机を作ってあげたのだ。それには、隠された引き出しが付いていて、本当にその引き出しは隠されているのだ。つまり、正しい呪文を知らない限り、誰もその引き出しを見つけることさえ出来ない。

けれども、Mum は Dad のような平和愛好者にはほど遠かった。

「ふーん！」と Mum は言った。「彼女は問題を起こすために生れて来たのよ、火花が上に飛ぶくらい自然な事だわ。Gammer は。」

「さあ、Cecily」Dad は言った。「君が僕の母親を好きじゃないってことはわかっている・・・」

「好きかどうかの問題じゃないのよ」力強く Mum は言う。「彼女は Hopton Pinhoe なのよ。あなたのお父さんと結婚するまでは浮ついた町っ子だったのよ。お父さんに大変迷惑をかけて、彼女はやった、あなたも知っているでしょ Harry！彼が荒野へと行くようになって、自殺したのは彼女のせいなのよ、もしあなたがきくのならば」

「さあ、さあ！Cecily！」Dad は Marianne がいることを知らせるように、言った。

「あー、私がそれを言ったってことは忘れて。」Mum は言った。「でも彼女が落ち着くなら驚きだわ、正気であろうとなかろうとね。」

### Chap.3

**“This was easier said ----- scamper off with Dad’s message.” 49-51**

これは、言うよりも実際難しかった。どんなに沢山の家具があったのか、誰もきづいていなかったのだ。Woods House 位の大きさ、かつて七人の子供がいる家族を収容したことがあるくらい十分な広さの家は、大量の家具を入れることができる。そして Woods House はそうだった。Joss Callow は Cedric 叔父の干し草用の荷車をとりに行き、それをひくため Reverend Pinhoe の年老いた馬を借りなければならなかった。なぜなら、農耕車は単純に十分でなく、それに一日かかってしまうだろうからだ。Edgar 大叔父は、誰かに彼の立派でこぎれいな車も使おうと提案されたら困るので、

この時点で用心深く去っていた。しかし、Lester 大叔父は寛大にも留まって、彼の車に小さめの品を乗せると申し出た。それでも、3 つすべての車は何回も Hopton 道上の大きな倉庫まで往復しなければならなかった。その間、若い Pinhoe の集団がそこにバイクやほうきで駆けでて、家具をおろし、安全に積み上げ、彼らの一番の保護魔法でくるんだ。同時に、Gammer が新しい家で必要だろうと人々が考えた沢山の品物が到着して、ロバの Dolly が、荷を積んでぎしぎししているカートを後に、Woods House の間を休みなしに行ったり来たりしていた。

「慣れ親しんでいるものが奇妙な場所にあるのって本当に“すばらしい”わね。」Sue 大叔母は言った。Marianne は、それはむしろ大叔母の感傷的気分だろうと個人的に思った。なぜなら、それらのほとんどは Gammer が使っている所などかつて一度もみたことがなかったものばかりだったからだ。

「それに、私たちはまだ、屋根裏部屋に手をつけてなかったじゃないか！」ロバ馬車がもう一度戻ってくるのを待つ間、Charls 叔父がうめいた。他の皆も屋根裏部屋のことなど忘れていた。

「昼食後までほっておこう」父さんは急いで言った。「それか、新しい家主のために残しておくこともできるな。上には、がらくた以外何もないしな。」

「僕はおもちゃの要塞を持っていたことがあって上にあるに違いないんだが」Simeon 叔父は物欲しそうに言った。だが、Richard 叔父がロバ馬車を母さんからの伝言を携えた小さい Pinhoe の女の子とともに持って帰ってきたので、Simeon 叔父は大抵のように、無視されてしまった。母さんは、明らかに Gammer がいったいどうなったのか知りたくてしびれを切らせてきているようだ。

「みんなは全部準備できてるよ」小さな Nicola は知らせた。「大きかった掃除するた。」

「何をしたですって？」叔母達全員がいった。

「床を洗って、乾かして、磨いて、カーペットがびったりはまったの。」Nicola が説明した。「それで、窓を洗って、壁もやって、新しいカーテンを取り付けて、全部の家具と絵と詰め物をされたサケに取りかかって、Stafford と Conway Callow が山羊を追っかけて、山羊は2人を角で突いて、それでね」

「ああ、大掃除をしたのね」Polly 叔母が言った。「今、分かったわ。」

「ありがとう、Nicola。走って帰ってみんなに Gammer がちょうど来るところだって伝えてきておくれ。」父さんが言った。だけど、Nicola は、先に彼女の説明を終わらせようときめていた。「それでね、2人は家に帰されて、Joe Pinhoe はね、怠けてるって怒られたの。私はちゃんとしてたわよ。手伝ったもの。」と締めくくった。彼女が父さんの伝言をもって逃げるように帰って行ったのは、それからである。

Nicola の台詞 “They sprung clent.” は、spring clean を過去形にしたつもりで間違ってしまったらしい。Nicola は小さいから ^ ^

## Chap.4

**“Millie found her there ----- ‘That’s better,’ said Millie.” 77-78**

Millie は彼女がそこにいるのを見つけた。彼女は、ぐしゃぐしゃのベッドに腰かけ泣きじゃくっていた。

「そんなに深刻に悩まないで。」そう言って Janet の隣に座った。

「馬と上手くやっていけないと気付く人なんて多くいるわ。Chrestomanci だって出来るとは思わないもの、わかるでしょ？彼はいつも馬は臭いのせいで嫌いだって言うけれど、それよりもっとある（それだけじゃない）と思うもの。」

「でも恥ずかしく思うわ！」Janet は涙を流した。「有名な騎手になることをたくさん話していたのに、今じゃ馬の近くに行くことさえ出来ないなんて！」

「だけど、試してみるまで分かることが出来たかしら。」Millie は尋ねた。「だれだってどういう風に生まれついたかをどうこうすることはできないわ。代わりに何か得意なものを考えなければならぬだけよ。」

「だけど、」Janet はそう言って、恥ずかしいと思う気持ちの核心を言った。「あんなに騒ぎたてて、Chrestomanci にあのお金を全部馬に使わせてしまったのよ、何にもならなかったのに。」

「Julia も同じくらい騒ぎたてていたと思うわよ。」Millie は言った。「結局彼女のために馬を買ったことになったわね。」

「それに、この服も。」Janet は言う。「とても高かったのに。もう二度と着ることはないなんて。」

「そんなの大したことじゃないわよ。」Millie は彼女に言った。「服は他の誰かにあげられるかもしれないし。五分で、最小限の魔法で Julia の二着目に あるいは他に誰か乗りたい人のために変えることも出来るわ。Rodger も乗りたいと思うかもしれないしね。」

Janet は Roger が彼女の服を着て Syracuse に乗っていることを考えて、自分がくすくす笑っていることに気づいた。それは全ての Related Worlds で最もありえないことのように思えた。

「その方がいいわ。」Millie は言った。

**“I hate this horse!”-----help Julia down on the roof.” 80-81**

「この馬なんて嫌い！犬のえさに値するわ！最悪だわ！」

「その通りだ。」Chrestomanci は言った。素晴らしいチャコールグレー色のスーツを着て Cat の隣に現れた。

「お前のために本当の馬を手に入れてもらいたいかい？」

「お父さんも嫌いよ！」Julia は叫んだ。「私たちが馬を欲しがるとして全くばかげていると思ったからこの馬を用意したんでしょ！」

「Julia,それは間違っているよ。」Chrestomanci は否定した。「私はお前たちがばかげていると思ったとも。だが、honest 本当にやってみて Prendergast に騙されたのだよ。もしお前が望むなら、太っていて大人しく、年老いたやつを手に入れてみよう。そしてこれは獣医の元へ送ろう。彼(おそらく獣医を指す)の名前は何かだったけ？」Chrestomanci は Joss に尋ねた。

「Mr.Vastion です。」Syracuse の揺れている頭から垂れている革のひもをほどきながら Joss は言

った。

「いいえ！」「どんな馬ももうたくさんだわ！」Julia は言った。

「Mr.Vastion を。それなら。」Chrestomanci は言った。

Cat は Syracuse ほどに美しく生き生きしたものが犬のえさに変えられてしまうことを考えるのに堪えられなかった。

「僕がもらってもいいかな？」Cat は言った。Syracuse も含め、皆が驚いて彼を見た。

「獣医が欲しいのかい？」Chrestomanci が言った。

「いや、Syracuse だよ。」Cat は言った。

「それなら、君の責任ですよ。」Chrestomanci は肩をすくめ、Julia が屋根から降りるのを手伝おうと向きを変えた。

## Chap.5

**“Both of them looked round -----how strong you are.” 86-88**

2 人ともふり返って Chrestomanci がそこに立っているのを見つけた。それは、Chrestmanci が、Joe の顔を真っ直ぐのぞき込んでいるようにみえるくらい、彼がとても背の高くみえる瞬間の一つだった。そして、Joe はそのとき、15 feet の空中にいたのだ。

「私は思うんだが」Chrestomanci は言った。「君は、飛びたいという大望を何か他の手段でかなえるべきだろう、少年。Eric は城の中で魔法を使うことを厳しく禁止されているんだ。そうだろう、Cat？」

「あー」Cat は言った。

Joe は真っ白い顔で言った。「彼のせいじゃ無いんです。えっと、卿。僕が彼に彼が Enchanter 魔法使いであることを証明してくれと言ったんです、おわかりでしょう。」

「証明が必要なのかい？」Chrestomanci は尋ねた。

「僕にとっては。」Joe は言った。「ここに来て新しいですから。つまり、彼を見てください。あなたは、彼が Enchanter 魔法使いにみえると思いますか？」

Chrestomanci は、思索した様子で Cat の方へ顔を向けた。「彼らは、色んな形や大きさで現れる。」彼は言った。「Cat の場合、ちょうど Cat のような他の 8 人の人達が他の世界で生まれ損ねたか、生まれるときに死んでしまったかしているんだ。きっとそのほとんどが同じく魔法使いだったのだろう。Cat は 9 人分の魔法を持っているのだよ。」

「一緒くたに押し詰められたみたいなものか。分かったよ」Joe は言った。「そんなに強いのも不思議じゃないな。」

「そうだ。ああ。この困った問題も落ち着いたな。」Chrestomanci は言った。「できたら、Eric、友達を下までおろしてくれるだろうね。彼が定められた仕事に取りかけられるように。」

Cat は Joe ににやっと笑ってカーペットの上にやさしく降ろした。

「行きなさい」Chrestomanci は彼に言った。

「つまり、僕をクビにしないというのですか？」Joe が、疑うように尋ねた。

「クビになりたいのかね」Chrestomanci は言った。

「はい」と Joe。

「それなら、君にとって、疑いなくとてもつまらない仕事をしていいと許すのは、君への十分な罰になるようだね。」Chrestomanci は彼に言った。「さぁ行きなさい。」

「くそ！」身をかがめて、Joe は言った。

Chrestomanci は、Joe が前屈みに部屋を出て行くのを見た。「なんてエキセントリックな少年なんだ」ドアがついに閉めれたとき、彼は言った。彼は Cat の方に向き直った。もっと楽しそうでない様子だった。

「Cat、、、、」

「分かってる」Cat はいった。「でも、信じてくれなかったんだ」

「長靴を履いたねこの話をよんだことがあるかね」Chrestomanci は彼に聞いた。

「うん」Cat は不思議に思っって言った。

「それなら、あの人食い鬼が、何か大きなものになろうして、食べられちゃうくらい小さいものになって殺されてしまったことを覚えているだろう」

「注意しなさい、Cat」

「でも、」Cat は言った。

「私が言いたいのは」Chrestomanci はつづけた。

「それは、一番強い魔法使いでさえも、彼自身の強さを自分自身にたいして使ってしまうことで破れることがある。私はあの少年が・・・」

「うん、彼はちがった。」Cat は言った。「彼は、ただ興味があっただけなんだ。彼自身も魔法使っていたし、どのくらい強いかはどれくらい大きいかによって決まってるみたいなんだ。(意訳)」

## Chap.6

**“But he had done better in ----- in the care of Mr MacDermot.” 102**

しかし、世界7Dでは、薬剤効果のあるクロッカスでいっぱいのへんぴな谷のある世界だが、彼はもっとうまくやった。はじめ、谷を所有している老人は、クロッカスの球根と交換してもいいと思うものを何一つ考えられなかった、さらに、彼は Jason にクロッカスは歯にとっても悪いと注意した。Jason は、老人を説得し、老人とその家族のために入れ歯に魔法をかけることで鞆いっぱいのクロッカスを手に入れた。そして、彼は、世界1Aにある、すべて世界中でたった一つしかない、暗緑色のシダ、これは実際風邪を直すのだが、が生えている山のことを話した。当然、山を所有している男は、それら植物を売ることととても裕福であり（売っている植物は根っこを除いて、他の人が育てられないようにしていた）そして、ほかの誰にもそれをとらせないと心に固く決めていた。彼は、警備用の獣や昼、夜と山を巡回する武装した男達を持っていた。Jason は、厳重な呪文のもと、夜に忍び込み、見つかって命がけで逃げ出さなければいけない前に数個掘り出した。警備員は Jason が世界5Cに飛ぶ前、世界2Aまで追いかけてきたが、あきらめた。今、そのうちの3つが、クレストマンシー城にあり、Mr.McDermot によって世話されていた。

“While he was wondering ----- ‘All right then,’ and went.” 108-109

彼がほかに何をいうべきか、城からのニュースを話そうか、それとも天気の話をするかと考えているうちに、Gammer は鋭くいった。「それで、今あんたはようやくここにきたんだね、行って Joe をすぐにここにつれてきておくれ」

「Joe?」Joss が言った。「でも、私も、城のニュースを伝えることはできますよ、Gammer」

「ニュースがほしいんじゃない、Joe がほしいんだ」Gammer は主張した。「私は、あんたが知っているように Joe がどこにいるのか知っている。それで私はここに Joe がほしいんだ。それとも、もう私のことを Gammer とは呼ばないのかい?」

「もちろん、呼びますよ」Joss は言って、話題を変えようとした。「今日はちょっと曇っていますが、」

「私をはぐらかすんじゃないよ、Joss Callow」Gammer が口を挟んだ。「私はあんたにここに Joe をつれてこいといったんだ。私は本気だよ。」

「だけど、結構あたたかいですね、実際サイクリングには少し暖かい。」Joss は言った。

「だれが天気のことなんて気にするんだい!」Gammer は言った、「Joe をここにつれてこいといっただろう。今すぐ行って彼をつれてくるんだ、私の機嫌をとるのはやめるんだね!」

これは、かなり明白で、完全に正気だと Joss には思えた。かれは、Arthur と語らい、Charles とダーツに興じるだろう Pinhoe Arms での午後が消えてしまったという思いにため息をついた。

「私に Helm St Mary まで自転車でひき返して Joe にここにくるよう伝えてほしいんですね?」

「そうだ。昨日やっておくべきだったんだよ。」Gammer は言った。「私はお前達若い者がいったいどうなっているのかわからないよ。私の出す指示に反論したりして。行って Joe をつれてきなさい。ほら。私が話したがっていると伝えておくれ、それから、それをほかの誰にも言うんじゃないと。行って。さあ行きなさい。」

それは、ピンホー族皆が感じる Gammer への畏敬の念で、Joss はもう口論も天気の話をする勇気もなかった。彼は「それでは、わかりました。」と言って行った。

## Chap.7

“But Syracuse was puzzled ----- he wanted less to meet.” 119-120

しかし、Syracuse は、困惑していた。なぜなら、これらの匂いや景色以上の何かが、あるはずだったからだ。Cat は Syracuse の意味するところを分かっていた。Cat も Syracuse も、何でかは知らないが、何かで満ちていなければいけないはずのカントリーサイドに空虚感があつたからだ。それは Cat に「距離」が不自然に失われていた Home Wood の時のことを少し思い出させた。楽しさと忙しさであふれていなければならないはずなのに、ここにはそれがなかった。だが、それでも、平和だった。彼は、静かに散歩を楽しみながら進んだ、丘を登り切って長い角を曲がるまで。そして、Chrestomanci 城が遠く次の丘にあった。

ああ、キャットは思った。歩くのはとても遅いな。夕飯を逃してしまうだろう。事実、彼らが厩舎の間にいったとき、まだ、夕方の早い時間帯だった。Cat が一つの門をあけて、Syracuse を通したとき、庭は、長い金色の光でいっぱい、そして二つの長い影がそこを横切っていた。ついてな

いことに、その影は、Chrestomanci と Joss のものだった。彼らは、となりあわせに並んで、Cat を待ちかまえていた。ほとんど同じ背丈の男が、こうまで違うように見えるのかと言うほど 2 人の姿はちがって見えた。Chrestomanci は熊手のように細いのに対し、Joss は大きく、どっしりしていた。また、Chrestomanci が暗く陰鬱な、一方で、Joss は( 怒りに )赤くなっていた。Chrestomanci は、細身で灰色の絹のシャツをきてい、Joss はいつものラフな革のジャケットに、緑のシャツだった。しかし、2 人とも、威圧的だったし、喜んでいるのとはほど遠い面持ちをしていた。Cat は、どっちにより会いたくなかったかほとんど判断できないほどだった。

## Chap.8

**“Beside the princess was ----- free to think about the house.” 137-139**

王女様のとなりには、金髪で明るい若い男の人がいて、そのきらきらした見た目を Marianne はすぐに好きになった。彼は、粋なブレザーと、とても洗練されて美しい、しわの寄った淡い色のズボン（Marianne に、王子様が普段着として着るだろう服だという印象をあたえるような）をはいていた。彼が、まさに彼女に与えるべきだった王子様だわ！と Marianne は思った。

彼らと一緒に男の子もいた。その子は、Joe が、嫌いな大人達と居るときにするちょっとやる気のなさそうな表情をしていた。Marianne はかれが、ちょうど Joe のように Edger 大叔父を好いていないのだと結論づけた。その子は金髪をしていたので、Marianne は彼が Irene と彼女の王子の息子に違いないと推測した。明らかに、物語は数年進んだのだ。Irene と王子は「めでたしめでたし」となった幸せな生活の真っ最中で、その生活を過ごすための家を探しているところなのだ。

Marianne はその考えにほほえみながら、彼らの方へ歩いていった。そうしていると、あの男の子が「これが正しい家だ！」といった。Irene は不安そうにその子に向き直って、「それは、ほんとに確実なの？Cat。とてもひどく荒れているわ」

Cat は確信していた。彼らはすでに二つの驚きな物件を訪れていた。一つは、じめじめしていて、もう一つは、天井が心の上に絶望のようにのしかかってくるような家だった。それから、彼らは、Irene がきっと Cat のような塔の部屋があるだろうと期待していたので、小さいお城だとして宣伝されていたものを見に行ったが、結局屋根が無かっただけだった。この家は、ええと、、、ツイードの植木鉢が突き出ているような帽子をかぶったでかい男が「おはようございます。私は Edger Pinhoe です。不動産のものです。」と大声で彼らに言ってきたとき、Cat はちょっとの間困惑した。その男は、Jason と Irene をまるで彼らが目下の者であるかのように見た。2 人は、Jason のとなりですこし弱々しく見えた。そして、Jason は結構がっかりした様子だった。だが、Irene は笑って手を差し出した。

「なんて奇妙なんでしょう」彼女は言った。「私の旧姓も Pinhoe なんです。」

Edger Pinhoe は、驚きうろたえた。彼は、Irene から後ずさった。「Pinhoe？Pinhoe だと？」彼は言った。「私は出来るなら、Pinhoe にこの家を売ると言われているんだ。」それ以降、彼は礼儀を思い出し、Irene とまるで火傷をするのではないかとおそれるように握手し、傲慢で同情的な表情を完全にけし去った。Cat はそれまでその男が何かの支配魔法を彼らに使っていたことに気付いた。いったんそれが解けると、Cat は自由に考えることが出来るようになった。

**“He found it right at the end----- been interested in the thing.” 149-150**

彼はそれをちょうど端っこ、自分自身が光を遮ってしまい、ほとんど何もみえないほど暗いところ、に見つけた。それは、大きくて丸く、古い蛾に食われた毛布でできた巣の上に座っていた。最初、Cat はただのフットボールだと思った。しかし、彼が、それに手を置いてみると、それは陶器で出来ているようだった。Cat はさわった瞬間、それがとても奇妙で、実に貴重であることが分かった。彼はそれを拾い上げ、（それは結構重かった）Marianne が飾り付けの入った箱の横に跪いているところまで、慎重にもぞもぞと戻っていった。

「君、これなんだか知ってる？」Cat は彼女に尋ねた。彼は、この家がハーブを扱う人の家だったことをしった時の Jason のように、密かな興奮に自分の声が震えているのに気付いた。

Marianne は金色のベルの列を床に置くのから、顔を上げた。「ま、それまだここにあったの？なんだかはわからないわ。Gammer はいつも Gaffer のばかげた冗談の一つだって言ってたわ。彼は Gammer にそれがゾウの卵だって言ってたんですって。」

卵かもしれない、Cat は思った。わずかな光の下でかれはそれをくるりと回した。ひょっとすると片方がより尖っていたかもしれない。その滑らかで輝く表面は藤色で、濃い藤色のまだら模様がついていた。それは、とくにかわいくもなかった。ただただ奇妙だった。そして、彼は、自分がそれを持ってなきゃいけないのだと分かっていた。

「僕が、僕がこれもらってもいいかな？」彼はきいた。

Marianne は不確かそうだった。「ええと、たぶんそれは Gammer のよ。」Marianne は言った。「私があげるものじゃないわ。」だけど、みんなが屋根裏のことを忘れてなかったとしたら、彼女は考えた。ここにある他のものみんなと一緒に片付けられて、きつと捨てられちゃってたわ。それにこの家は、ここに残されているものすべて含めて、実際父さんのだし。それでいえば、Marianne には、がらくたの一つをあげる申し分ない権利があった。他のだれもそれをほしがらないだろうから。

「ええ、いいわよ、もらっちゃって。」彼女は言った。「それに興味を示したのはあなただけよ。」

## Chap.9

**“The mistake has been ----- popped through the space.” 161-163**

間違いは、障壁に真っ直ぐつつこんだ、つまりクレストマンシーに真っ直ぐつつこんだことだ、キヤットはそう結論づけた。そうすると、（まっすぐ行くと）投げ捨てられるように設計されていたに違いない。うん、そうだ。あれは、人を振り捨てて、追跡をもたつようにつくられたんだ。だが、今、キヤットはそこにバリアがあることを、そしてそのバリアの後ろにどうしてかクレストマンシーがいることを知っていた。つまり、バリアまで忍び寄って行って、もしかしたら横向きにすり抜けられるかもしれないということだ。それか、もし、それしか方法がないのなら、とても粗雑なつくりだから、壊すこともできるだろう。そして、彼は、左利きの魔法使いであることが強みになるとかなり確信していた。あのバリアはまるで、右利きの、それも、むしろ前から、かなり頑固な（彼らのやり方に固執した、融通のきかない）人たちによって作られたように感じられる。キヤットが、賢くやれば彼らの不意をつくことが出来るだろう。キヤットは、起きあがって、部屋をぶらりと出、



螺旋階段を下りていった。バリアを作った人たちにキャットがもう一度試そうとするのではないかと予期されると困るので、思考を意図的に曖昧とさせながら、城の中を通り、厩舎の横にでた。ここで彼には Syracuse と話に行きたいという切望で切ない一瞬があったが、Chrestomanci がなんと言おうと後からやるのだと自分に言い聞かせ、Roger と Joe が会って機会について話している小屋の方へゆっくりと歩いていった。彼らは、その時もそこにいた。Cat は Roger が「うん、だけど、もし僕たちがこれの特許をもってれば、みんな使おうとするよ。」Cat はにやりとして、かれらの Don't Notice Spell の中にこっそりにじり寄った。これで、今、彼を隠しているのは彼自身の魔法でさえないのだ。そして、Cat はもう一度自信を出発させた。

今度は、とても静かに、左側から行った。彼の強い左手を前につきだしてかまえ、弱い部分を見つけるまで、バリアに向かって漂いながらバリアを感じた。そこで、(弱い部分で)とても静かに、彼は金網のように見えるものの一部をわきへ曲げて、そのスペースからひょいっと入った。

## Chap.10

**“Nutcase was reappeared ----- Drawn him if you like.” 184-186**

Nutcase は、ちょっとした、また Woods House のホールに、まさにはしごと漆喰のバケツをもってホールを横切ろうとする Charles 叔父を転ばせるのにちょうどタイミングよく(ちょうど間に合うように)現れた。Charles 叔父は自分を守ろうとして、はしごに自分の後頭部を打ちつけ、Nutcase に漆喰のバケツを落っことした。ガラガラ、グシャッという音が Jane James と Irene をキッチンから、Janet、Julia と Jason をダイニングルームになる予定の所から呼びつけた。皆、家屋塗装工(Charles のこと)が漆喰の湖のなかではしごの下敷きになって倒れ、そして横にはひどく白い猫の頭がひっくり返った漆喰のバケツの下からつきでている光景をみて、同情の叫びを上げた。

Charles 叔父は、Jane James の顔をみて、ののしるのはやめたが、皆(the world at large = 世間一般)に対して Nutcase に何をしてやりたいかを言い続けた。あとで、彼が Marianne に言ったことには、頭への打撃がそうさせていたのだという。そしてあの 2 人の女の子達(J & J)は笑った。

「だけど、大丈夫かい？」Jason は彼に訊いた。

「あの猫が死んでてくれてたらもっと良かったんだが」Charles 叔父は答えた。「私はあの猫をころせなかったんだろう？」

Janet と Julia は笑いすぎないように努力しながら、(失敗していたが)、バケツを傾けて Nutcase を救出した。Nutcase は貧弱で、爪でひっかく動作をしていて(?)ほとんど真っ白だった。Nutcase がじたばたすると、漆喰が皆に飛び散った。Janet は、Irene と Jason が Charles を助けに飛び込む間、Nutcase を腕の長さ分はなしてもち、顔を横に背けていた。「まゝ黒猫だったのね！」Nutcase の下側が見えて、Julia が叫んだ。Jason の足が漆喰の中で滑った。彼は Irene の腕をつかんで自分を救おうとした。結果は、Jason が漆喰にうつぶせにぱったり倒れ、Irene が漆喰のなかに尻餅をついたのだった。Irene はただ床にすわって笑ったので、Janet の Irene への気持ちは完全に変わった。

「いい服がみなダメになってしまったな」Charles 叔父が Marianne に言った。かれは、少しふらふらしながら、Nutcase を片腕に抱えて Furze Cottage に到着した。「魔法使い(enchanter)で

さえも、不幸の呪文を避けることはできないことがしめされただけだな。あの男（Jason のこと）は完全な enchanter だよ。でなければ、私は熱心な中国人さ。Gammer には彼がそうだと言うんじゃないよ。彼女は怒るだろうから。彼は、自分の顔がまだ漆喰の中にあるのに、私を立たせてくれたんだ。猫を連れて行きなさい。洗っておいで。よかったら溺れさせてやってもいいぞ。」

## Chap.11

**“The egg started hatching ----- was an exhausted silence.” 193-194**

その晩、卵が孵り始めた。Cat は始まったとき、本当に寝付いてはいなかった。彼は、ベッドに横になって考えていた。その晩の夕食の時、Julia が油でよごれたで灰色がかったラベンダー色の袋のことを話したのだ。Chrestomanci は何も言わなかったが、かれは非常にぼーっとしていた。Chrestomanci がぼーっとしているように見えるとき、それは彼が特に細かく注意を払っているといことをいつも意味するのだ。Cat は、Chrestomanci が Jason にすべてを訊くため、後で彼を書斎に連れて行ったのを見ても驚かなかった。Ill - Chancing（不幸のまじない）は、魔法のひどい悪用であり、結局、それらを止めるのが Chrestomanci の仕事なのである。問題は、Cat は Chrestomanci に Mr.Farleigh のことも告げるべきだと分かっていたことだ。なぜなら、彼は、あの袋が Mr.Farleigh が川辺で言っていたものの一つだとかなり確信をもっていたからだ。

彼は、なぜ自分が何も言わなかったのか理由を考えようとした。一つ良い理由は、Joss が明らかに何らかのスパイであることで、Chrestomanci に報告することで Joss のことがばれてしまうという事だ。Cat は Joss が好きだった。彼は、Joss を面倒に巻き込みたくなかった。そしてそれはとてもひどい面倒になりそうだと Cat はわかっていた。だけど、本当の理由は、Mr.Farleigh が Cat が Syracuse に乗ってそこで一言一句聞いている間に、そんな事を喋ったからだった。もし、彼が Chrestomanci を金網の障壁の後ろに閉じこめる事が出来るくらい十分に強かったのなら、彼が望むなら城の皆を厄介払いするに十分な不快でねじれた力をもっていたということだ。彼は多かれ少なかれそう言っていた。

現実には、Cat は思った。あいつをひどく怖がっているからなんだ。

Cat がかすかなノックの音を聞いたのはその時だった。

最初、彼はそれがまだ窓から来ているのかと思った。しかし、起きあがって座り、聞いていると、その音は部屋の中から聞こえてきていることがわかった。彼は、電気をパチリとつけた。十分確かなことに、大きい藤色のまだら模様の卵がウィンタースカーフの巣の中で緩やかに揺れ動いていた。中からたたいている音は次第に強くなってきていた。まるで、中にいる何かが出ようとパニックになっているようだった。そして、音がやみ、疲れ切った静寂が訪れた。

**“It was much lighter than ----- who said ‘Me neither.’” 200**

それは、Cat がそうあるべきだと思っていたのより、その大きさにしては軽かった。Millie の sitting ルームの戸が開いて、Chrestomanci が不安そうな顔で Jason を後ろに従えて駆け込んで来たとき、Cat は、ちょうど Millie にいったいこれは何の生き物なのか訊こうとしていたところだった。「な

にかいざこざがあったのか？」Chrestomanci は訪ねた。

「いいや、そう言う訳じゃないわ」Millie は言って、Cat の腕の中にいる生き物を指さした。

Chrestomanci は敷物の上の二つの半分に壊れた卵の殻から、Cat の抱えている生き物を見やった。彼は「おやおや、なんてことだ！」と言って、見ようと近づいた。彼は、指でその生き物の背中を、その柔らかいくちばしから糸のようなしっぽまで、なぞり、しっぽをつまみ上げて先についたふさを見た。それから Chrestomanci は、もう一つの側にうつり、長いピンクの爪を観察した。最後に、生き物の肩から伸びている二つのふわふわしたちいさな三角形のものの一つを広げた。「おやおや！」彼はまた言った。「これは本当にグリフィンじゃないか。これは翼だよ。ほら見てごらん。」それらは、Cat にはあまり翼っぽく見えなかった。それには、羽はなかったし、残りと同じ淡いぶ毛で覆われていた。でも、Cat は、Chrestomanci は知っているのだろうと思った。「何をたべるのかな？」Cat は訊いた。

「知っていたら首をやるよ (( I'll be ) blowed, if --- の慣用句 )」Chrestomanci は言って、Jason を見た。「私も知りません。」

Phew...it was quite long :P there might be some mistakes...apologize.

anyway Good Luck on EXAAAMMM!!!

Translated by Morika O., Ayumi T.